

2025 年 11 月 2 日（日）「バビロンに属するもの、永遠に属するもの」

ヨハネの黙示録 14:6-13

6 また私は、もう一人の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、部族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて、7 大声で言った。「神を畏れ、神に栄光を帰しなさい。神の裁きの時が来た。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」

8 また、別の第二の天使が後に続いて、こう言った。「倒れた。倒れた。大バビロンが倒れた。情欲を招く彼女の姦淫のぶどう酒を、あらゆる国々の民に飲ませたこの都が。」

9 また、別の第三の天使も後に続いて、大声でこう言った。「誰でも、獣とその像を拝み、額か手にその獣の刻印を受ける者は、10 その者たちも、神の怒りの杯に注がれた、混ぜものなしの怒りのぶどう酒を飲むことになる。また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。11 その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者たち、また、誰でも、獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も安らぐことはない。」12 ここに、神の戒めを守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐がある。

13 また私は、天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主にあつて死ぬ人は幸いである。』」霊も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。なぜならその業が彼らに伴うからである。」

【序論】

私たちは限りある人生を歩んでいます、限りある中にも「限らないもの」との接点を持つようになりました。それは、福音のことば、永遠なる神との関係です。もし地上の事柄だけに終始する人生なら、それは死と共に朽ちゆく虚しいものでしょう。しかしながら、「限らないもの」との関わりのうちを生きていくとき、私たちの日常の小さな出来事にさえ「永遠の世界」に続く意味が見出されるようになるのです。毎週集う礼拝——これはまさしく永遠的な営みであり、私たちが神との関係のうちにあることを確かめるときと言える。今日もこのように一同が集い主の御前に出ているということを、人生の特別な瞬間と捉えたいのです。

【本論】

今日は 14 章の続きを学んでまいります。ここには三人の天使による宣言と、それに続く一つの「天からの声」が記録されています。ざっくりと全体的な内容を整理すると、「神に属する者」と「バビロンに属する者」の決定的な行末の違いが示されていると言えるでしょう。そこで、「バビロン」とは何であるかの解明も必要になってまいります。

本論 1. 第一の天使の伝令

また私は、もう一人の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、部族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて、大声で言った。「神を畏れ、神に栄光を帰しなさい。神の裁きの時が来た。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」（14:6-7）

ここに登場する天使は、福音の伝達者。この天使は「**地上に住む人々**」に向かって語ったとされています。「天使」とはいえ、その行動の本質は教会の使命そのもの。全世界に出て行って福音を宣べ伝える役割は、まさに救いのメッセージを携えたキリスト者の姿を表しています。「**永遠の福音**」という印象深い表現が出てきましたが、それは救いを受け取ることがその人にとって永遠的結果をもたらすことを意味しているでしょう。救いを受け取った人は礼拝者となるのですが、それは地上でささげるだけの礼拝ではなく、永遠に礼拝し続ける者になるということです。天使の勧めには三つの要素が含まれています。

- ① 神を畏れること
- ② 神に栄光を帰すること
- ③ 創造者なる神を礼拝すること

このメッセージが語られている文脈は「**神の裁きの時が来た**」という危急の時。もはやそれに備える時間が残されていない状況で語られている。つまり、むしろこれは福音を受け入れた人々の生き方の本質を再確認していると言ってもよいでしょう。救いを受け入れることは、その人を礼拝者へと造り変えるのです。

本論 2. 第二の天使による宣告

また、別の第二の天使が後に続いて、こう言った。「倒れた。倒れた。大バビロンが倒れた。情欲を招く彼女の姦淫のぶどう酒を、あらゆる国々の民に飲ませたこの都が。」（14:8）

第二の天使が告げる内容は、「**大バビロンが倒れた**」というものです。黙示録を最初に読んだ第一世紀の読者たちは、これを「ローマ帝国の滅亡を予告するメッセージ」として捉えたことでしょう。「バビロン」ということばそのものは、バビロニア帝国の首都を指し、元来この都市が歴史上目立つ存在となったのは紀元前 18 世紀に現れたハムラビ（前 1728-1686）の時代でした。彼は「ハムラビ法典」を制定し、力ではなく「法」によって国を治めようとしました。それは、神の義を求める人間の試みであったとも言える。ところが時代が進み、新バビロニア帝国の王ネブカデネザルは紀元前 6 世紀に南ユダ王国を滅ぼし、その住民の多くを捕囚として連れ去りました。そのような背景により、翻って、神への甚だしい反逆を行なった帝国として「バビロン」は一つの称号となったのです。

バビロンは主の手にある金の杯、全地を酔わせた杯。諸国民は彼女のぶどう酒を飲み、それゆえに、諸国民は酔いしれた。しかし突然、バビロンは倒れ、砕かれた。彼女のために泣き叫べ。（エレミヤ 51:7-8）

今日の箇所は明らかにこのエレミヤのことばを意識しています。第一世紀のローマは更に規模を拡大した帝国であり、その植民地下にある民にとっては「永遠の支配」に感じられたかもしれません。しかし、その支配はいつまでもは続かないことがここで予告され、如何にも黙示文学らしいアオリスト時制でもって「倒れた」と表現されています（預言的過去）。

「情欲を招く彼女の姦淫のぶどう酒」という表現は、ローマの支配下に入った民がこぞってその支配に甘んずる生き方を選んでいったことを意味するでしょう。偶像礼拝を拒まぬ生き方の選択。それは、まるで酒に酔うかの如く、人生の足腰をフラフラにさせ、よろめき倒れる道であることを示しています。

本論 3. 第三の天使の宣告

また、別の第三の天使も後に続いて、大声でこう言った。「誰でも、獣とその像を拝み、額か手にその獣の刻印を受ける者は、その者たちも、神の怒りの杯に注がれた、混ぜものなしの怒りのぶどう酒を飲むことになる。また、聖なる天使たちと小羊の前で、火と硫黄で苦しめられることになる。その苦しみの煙は、世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者たち、また、誰でも、獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も安らぐことはない。」ここに、神の戒めを守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐がある。（14:9-12）

第二の天使がバビロンの滅亡を予告したのに対し、第三の天使はバビロンに属する人々にどういう結果が及ぶかを宣告します。「獣の刻印」については13章で学びましたが、この時代には実際にローマ帝国から発行された「証明書」を提示することで庶民は市場で売買が可能になったと言われています。その証明書を入手するためには皇帝礼拝をしなくてはならなかった。それを拒んだ人々は社会から事実上抹殺されたのですⁱ。しかし、そのような苦しみ耐え抜いた人々もいました。我も我もと証明書を手に入れるために獣とその像を拝んだ多くの人は、「バビロンに属す者」として神に判断されることになる。彼らは「神の怒りの杯に注がれた、混ぜものなしの怒りのぶどう酒を飲む」と言われていますが、これは神の怒りが水で薄められていないことを意味し、まともに審きの対象になるということでしょう。審きの内容として語られている「火と硫黄」「苦しみの煙」「昼も夜も安らぐことはない」というのは「地獄」の本質であって、これは聞くも恐ろしいことではありますが、混ぜ物をして伝えることはできません。

誰の刻印を身に帯びているか、それこそが神の御前に立つときの最も重要な基準となる。小羊イエスの名をこの額に、この心に刻む必要があるのです。「神の戒めを守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐」——これは黙示録の冒頭でも言われていたこと。

ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてを証した。（1:2）
「神の言葉とイエス・キリストの証し」——「神の戒めとイエスに対する信仰」、これらは本質的に同じことと捉えてよいでしょう。イエス・キリストの永遠の福音を宣べ伝えるのがキリスト者の使命であります。

本論 4. 第四の声

また私は、天からこう告げる声を聞いた。「書き記せ。『今から後、主にあつて死ぬ人は幸いである。』」霊も言う。「然り。彼らは労苦を解かれて、安らぎを得る。なぜならその業が彼らに伴うからである。」(14:13)

この声の主については「第四の天使」とは言われていません。むしろキリストご自身のご命令か。10:4 ではヨハネが天来の声を書き留めようとしたが止められました。しかし、ここでは積極的に「書き記せ」と言われています。それほど重要なメッセージであり、聞いた者の責任として記録されなければならないということです。「主にあつて死ぬ人」——それは主イエスへの信仰を最後まで持って世を去る人のこと。これこそが聖書が語る究極の「幸い」である。それが黙示録の結論なのです。しかし、その道のりが平坦ではないことが繰り返し語られており、主イエスご自身も「目を醒ましていなさい」と言っておられます。

だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が来られるのか、あなたがたには分からないからである。(マタイ 24:42)

私たちの人生の終わりまで、信仰の道から脱落させようとする何らかの力が働き続けるでしょう。その策略に対して目を醒まし、ついには「労苦を解かれて、安らぎを得る」、その永遠の安息に到達したいと願います。

【結論】

第一世紀において「バビロン」とはローマ帝国を表すことばでした。しかし、このことばは時代を超えて、終末期にはより大きな規模に拡大した暗黒の帝国を指すようになると私は理解しています。共産化が世界規模に進んだ世界がやがて訪れるかもしれません。当時とは全く異なる IT による支配体制が出来上がる可能性は高い。実際、いま世界の大手銀行が次々とステーブルコイン構想を進め始めています。ゴールドマンサックス、シティグループ、ドイツ銀行、スイスの UBS、三菱 UFJ 銀行…。更に、ユーロに連動したステーブルコインの話も出てきています。つまり、主要通貨がすべてステーブルコイン化する段階に世界が入ろうとしているのです。ステーブルコインの最大の特徴は「すべての取引が記録される」という点ですⁱⁱ。いつ、誰が、どこで、何にいくら使ったか……これらがすべてデータとして残るのです。このことの意味する最大のリスクは、信教の自由の事実上の剥奪でしょう。献金の履歴を政府が把握するようになるからです。共産主義とは無神論の世界観——これは宗教弾圧につながる思想なのです。

そういう現代的な「バビロン」に対して、私たちは小羊イエスの刻印を身に帯びた者として歩み続けたいと願う。なぜなら、地上の「バビロン」は永遠には残らないからです。永遠に残るものは「神のことばとイエスの証」。私たちの日々の生活の中で、自分が心を注いでいるものが「やがて滅びゆくもの」であるか、「永遠に属するもの」であるか、丁寧に問いながら歩み続けたいと思いますⁱⁱⁱ。

【祈り】

天の父なる神様。あなたの御前にひれ伏し、心からの感謝をささげます。この世のバビロンがどれほど力を誇り、人々を魅了しようとも、私たちは小羊イエスの刻印を帯びた者として歩みたく願います。私たちの心が、消費や支配の渦に飲み込まれそうになるとき、あなたの御霊が内なる声で呼び戻してくださいますように。すべてが記録され、見張られる世界の中でも、あなたに知られることを喜びとする者でありますように。この地上のバビロンは倒れます。しかしあなたの国は永遠に立ちます。どうか、朽ちゆくものではなく、永遠に属するものに心を注ぐ信仰を、私たち一人ひとりにお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
各時代に出現する「バビロン」を打ち砕き、神の国の支配を拡大させておられる、主イエス・キリストの恵み、
各々の生き方に応じた「公正なる裁き」を、終わりの日に実現してくださる、父なる神の愛、
朽ちゆくものではなく、永遠に属するものに心を向けさせる、聖霊の親しき交わりが、
ここに集う一人びとりと、その家族と、友人と、この時代を生きるすべての信仰者の上に、
今も後も、限りなく豊かにありますように。

-
- ⁱ 現代では、デジタル経済の支配構造（ブロックチェーン通貨・ステーブルコインなど）が、この「刻印的支配」に類するものとして議論され始めている。
- ⁱⁱ ブロックチェーン技術による完全記録型の経済圏は、効率性と透明性の名の下に進行しているが、その背後には「取引の完全監視」へとつながる懸念がある。黙示録 13 章の「獣の刻印」的構造との関連が、近年神学的にも議論されている。
- ⁱⁱⁱ 現代の「バビロン」とは、フリーメイソンの世界秩序、イルミナティ思想、国際金融支配構造など、人間が神を離れ「自らが統治者となる理想」を追求する流れに象徴される。しかし主題は、敵の暴露ではなく「その中で信仰を守り抜く者の忍耐」（14:12）にある。